

先日新刊の営業で増田書店を訪ねたのですが、たまに篠田さんはお休みでいらっしやいませんでした。お借りしていたFUGAZIのDVDも持ってきていたので、失礼とは思いつつ、篠田さんがお休みだと教えてくれた男性の店員さんに「篠田さんにお渡ししていただけないでしょうか」とDVDを差し出しました。すると、その方は「あ、FUGAZI」といって、にこっと笑ったんですよ。ああ、この人は篠田さんと音楽の話をするんだな、と思って、それだけでなんだかうれしくなっていました。

今年の二月から、会社をはじめて十二年目にして、ひとを雇うことになりました。アルバイトの男性で秋くんといいます。ぼくよりちょうど十歳若く、週に一度だけ、朝十時から夕方四時半まで働いてくれます。

だれかといっしょに働くなんで、ずいぶんと久しぶりのことだったので、秋くんがはじめて会社に来る日までは、正直、気が重かったのです。自分ひとりで働くペースというのが完全にできあがっていました。



がんばれば、業務もなんとかひとりで回すことができていました。それでもどうして、ひとを雇ったかという、篠田さんも書いてらっしゃったとおり、「年下の人たちの存在に希望を感じる」ようになったからです。そう感じはじめたのが、ぼくの場合、四十代に入ってから、と極端に遅いのですが……。

ぼくはある時期までは、年上のひとたちに認めてもらいたいとそういう一心で、いろんなものを読んだり、聴いてきたりしたように思います。いま思い出しても恥ずかしいのは、大学生のとき、一歳上でドラムを叩いている先輩から、「最近、なにを聴いてるの?」と聞かれ、この場合なにが正解なのかを考えに考え（といっても、五秒、十秒のあいだですが）、相手に隙を見せたくないとの思いから、「ロバート・ジョンソンです」とこたえたことです。二十歳そこそこの若者が熱心に戦前の音の悪いブルースを聴いているわけなんてなく、ただ大枚をはたいて買ったからそうこたえたんですが、このときは相手が大人で「そんなわけねえだろ」と笑い飛ばしてくれたから深傷を負わずに済みましたけれど、これと似たような恥ずかしい思い出がぼくにはいくつもありません。

大学を卒業してからは、犬飼さんという十歳も上の先輩がぼくの読書を励ましてくれました。犬飼さんは証券会社の営業をしながら、『失われた時を求めて』や『源氏物語』『カザノヴァ回想録』を読んでいました。「お忙しいでしょうに、いつ読むんですか?」と聞いたら、先輩は当り前のように「お昼を食べながら読むんだよ」とこたえました。書斎や研究室ではなく、パンを食べながら、定食を食べながら、あるいはうどんをすすりながら、『失われた時を求めて』を読むひとがこの世にいるんだ、と知ることができたことは幸運以外のなものでもありません。犬飼先輩はぼくが大学時代に入っていた文芸研究会のOBで、いまでも年賀状だけですがつきあいがあります。ぼくは犬飼さんに認めてもらいたいという思いもあって、ある時期、長い小説ばかり読んでいました。

ぼくが夏葉社をはじめたのは二〇〇九年、三十三歳のときで、このときもまだ、年上のひとたちに認めてもらいたいという思いがかなりあったように思います。具体的に名前をあげると、和田誠さん、荒川洋治さん、岡崎武志さん、山本善行さんといったひとたちです。ぼくは彼らに助けられて、起業してからいちばん難し